

■読む力がしっかりしていないと国語の力は危うい■

阿部 ●さまざまな学校で「読むこと」の授業を拝見するのですが、その多くが子どもたちにどういう力を身につけさせるのかというところが、とても曖昧であるように感じます。先生によっては、子どもたちがたくさん発言をするように誘い、子どもたちもハイ、ハイと手を挙げる授業があります。とても活発なのですが、そうした先生方、その授業を通して、読むことに関するどういう力がついたのですかと尋ねても、明確な答えが返ってこないんです。

安田 ●確かにご指摘のとおりかもしれません。今、現場では指導時間が極端に減っています。「読むこと」に費やすことができず、その中でもさらに減っているんです。先日、ある先生が、「安田先生はこの教材をどう教えますか。」とおっしゃったんです。わたしが、「クラスの子どもにどういう力が足りなくて、どういう力をつけたいと思う?」と尋ねると、途方に控えてしま



座談会

しっかり身につけたい 読む力

いました。先生方も時間に追われて、じっくりと考えているゆとりがないのが現状だと思います。

上谷 ●ご指摘のように指導時間の問題もあるでしょうけれど、「読むこと」の授業でどういう力をつけさせるか、ということが明確にならないのは、そもそも、「読むこと」と「伝え合う力」の関係がはっきりしていないからだと思います。新学習指導要領で「伝え合う力」の育成が重視されて六年たちますが、依然として、「読むこと」と「伝え合う力」との関係が不明確だと思います。

阿部 ●まず、「読むこと」と「伝え合う力」の関係を明確にしないと、読むことの授業を通して、確かな力を身につけることは難しいでしょう。その部分が曖昧だと、授業が活動のほうだけに流れたり、あるいは、ドリル的な方向に走ってしまいがちだと思います。

上谷 ●ドリルなどが行われやすくなるのは、補充的な学習と発展的な学習の影響もあると思います。本来は、例えば、物語の教材



上谷 順三郎
(かみたに じゅんさぶろう)
鹿児島大学助教授



安田 恭子
(やすだ きょうこ)
新宿区立西戸山小学校教諭



阿部 昇
(あべ のぼる)
秋田大学教授



があつて、その授業を充実させるために補充があり、さらに発展があるはずなんです。ところが、そうした「発展と補充」を必ず設けなければいけない、ととらえてしまい、結果として授業がドリルや活動に流れてしまうのです。

安田 ●最近「読むこと」に関する研究会が増えていますが、それは、先生方にこれでもいいのか、という問題意識があるからだと思います。読む力がしっかりしていなければ、まさに国語の力は危ういという反省に基づくものだと思います。多くの先生方は、そこを大切に考えていかないと、授業が活動やドリルの方向に簡単に流れてしまい、それであたかも自分がしっかりした指導をしたような感じになってしまうことを察知しているのだと思います。

阿部 ●わたしは、物語にしても説明文にし

読み比べから最初の場面を読み深めていき、子どもたちが「つぶやきました」「きき返しました」などの文章表現に目を向けるようなことを意図しています。

阿部 ●同じ三年生の「ありの行列」でいえば、現行版の場合、「学習」で「はじめて知ったことやおどろいたこと、ぎもんに思ったことを発表しましょう。」とあり、その後に、段落ごとに番号をつけながらノートに整理する学習があります。これはこれでもいいのですが、十七年度版には、どのようにして子どもたちに説明文を読む力をつけるか、という視点をより明確に盛り込みました。「ありの行列」では、初めの段落で問いが示されています。ここに着眼させるために、「学習」のところに新たに「はじめの段落に『問い』がしめされています。どんな『問い』でしょう。」と設けました。子どもたちは、こうして文章の読み方を覚えると、他の教材を読むときにも、問いはどれだろうと考えるようになると思います。これが身につけば、しっかりした読みの力になっ

ても、子どもたちがしっかりと読むことができるようになる方法はある、と考えています。それは、子どもたちが自分の力で文章の大事な箇所を見つけることができたり、見つけたところを読み広げ、読み深めたりすることができるといことです。このようにすれば、子どもたちが読む力を身につけることができるといってもいいでしょう。それをもっと国語教育の中で明確にして、教科書に反映させていく必要があります。それも低学年から高学年に向けて段階的に力をつけていく系統性をもった反映のさせ方が求められます。

■繰り返しと同時に質の高まりを■

上谷 ●来年から使われる十七年度版教科書では、今話されたような読むことに関しての問題をかなり踏まえた内容になっていると思います。例えば、「ちいちゃんのかげおくり」(三年)を見ると、「学習」のところで、音読に重点を置くのではなく、場面の読み比べに重点を置いています。最後の場面との



ていきます。

安田 ●「三つのお願い」(四年)も、現行版と十七年度版とを比べるとその違いが明らかですね。現行版は、聞き手に語りかけるように音読しようとか書かれてあるのに対し、十七年度版は三つのお願いについて、だれが、いつ、どこで、だれといっしょにしたどんなお願いかを確かめるように呼びかけています。

上谷 ●子どもたちが自分の読みに立ち止まって考えることができるような場を設けて、繰り返し読むようにしていくことが大切です。「読みの振り返り」ですね。例えば、「二つの花」(四年)を読むときに、同じ平和教材ということで、三年生で学んだ「ちいちゃんのかげおくり」を、もう一度読み返すこともできます。

阿部 ●「読みの振り返り」を学んでいく中で、



その質はレベルが高くなります。三年の新教材として、「すがたをかえる大豆」があります。ここの「学習」では、『はじめ』の部分で、これから何についてせつめいするかが分かる。『終わり』に、

全体のまとめがある。」という助言によって説明文の典型的な形を学ぶことができます。これは、同じ三年で学んだ「ありの行列」を受ける形で設けられたものです。「ありの行列」で文章の初めには問いがある、と学んだことを受けて、繰り返しつつ、発展させているわけです。

安田 ● そうした系統性はとても大切だと思います。先生方には、教科書を全学年にわたってぜひご覧になっていただき、どんな教材があるのかを確認していただきたいですね。そうすると、この教材はこの程度のおさえ方でいいのかとか、逆にここまででは

■読みの力を身につけるには多様なアプローチがある■

阿部 ● わたしたちは、「読むこと」は今のままではいけないという危機感から十七年度版教科書では方向修正を加えました。そうした意識をさらに突っ込んで、より具体的にまとめたのが、今編集中の別冊指導書『読むこと』の指導です。

上谷 ● この指導書は、二部構成になっています。一部が読みの力をつけるという内容です。二部は「読書力、情報活用力」をつける内容になっています。一部では、例えば、下の学年で学んだこの教材は、今回このように生かせるとか、こんなふうに教材を組み合わせたり補ったりすると、このように読み返すことができるなど、つきたい力を明確にすることで、自由に単元を構想できることを知ってほしい、という願いでまとめてあります。二部で扱う情報活用力は、情報活用力を身につけさせたいと考える先生方には、単元どうしがどのようにつながっているのかわかるようにしました。

やらなくてもいいんだな、と指導の焦点が明確になってくると思います。ここまでやったら、この教材はこれでよし、という一つの踏ん切りも必要でしょうね。

阿部 ● 子どもたちに、教材を使って国語力をつけるんだ、とお考えいただきたいですね。もちろん教材は読むわけですし、作品のおもしろさも味わうのですが、すべてを詳細にやらなくてもいいんです。教材を教えるのではなくて、教材で教える姿勢で臨んでいただきたいですね。

上谷 ● 十七年度版教科書では、先生と子どもたちがいっしょに考えるような工夫をして教材を提示していますので、それらをしてつかりとやってくだされば、多くの問題はきつと解決します。そういう目で教科書を見直していただければ、「読むこと」についての意識がずいぶんと変わるのではないかと思います。

安田 ● 情報活用力を身につけようとする場合、こんな単元をもう一回見渡してくださいということが、この指導書を読むととてもよくわかりますね。例えば、「アップとルーズで伝える」（四年）の関連として「新聞を読む力の基礎を育てる」という単元があ



ります。こういうつながりは、生活の中ですぐに使える読みの力という感じがします。例えば、前に学んだ文章の一節を教室の壁に拡大して貼って、重要語句や主述のつながりを示しておきます。そうすると、知らず知らずのうちに、次の文章を読むときの力になっていくと思うのです。

上谷 ●二部の「読書力、情報活用力」に係るのですが、やはり読書も指導しないといけない。読書教育や読書指導の考え方は、なかなか浸透しにくいもので、自由に任せたらいいとか、消極的なところがあつたように思います。この指導書では、読書を指導することで読みの力を養うことができるという提案もしています。

安田 ●教科書教材以外のたくさん教材がこの指導書に提示されているというのはとてもいいことだと思います。これを手にした先生方が、「この作品、おもしろそう。」とか、「ねえ、やってみない。」と子どもたちに伝えることで、子どもの心に染み込む指導につながると思うのです。だから、ま

まさに個に応じた指導となるわけなんです。**上谷** ●結局、形態や方法ではなくて、どこに目を向けて授業をするかで個がひらかれてくるということだと思います。例えば、詩をいくつかあげておいて、子どもたちに好きなものを一つ選ばせるとか、並べ替えて自分で詩を作らせるとか、ということを設定すると、個々への対応ができますね。**阿部** ●確かな読みの力を身につけさせるためには、まず、子どもたちにこういう力をつけさせないといけないということを明確にすることが求められます。同時に、もっと多様なアプローチがあつていい。そこにいくためには、ワンパターンである必要はないんです。この指導書は、そんな多様なアプローチのあり方をふんだんに紹介しています。わたしたちの挑戦的なこの指導書を、ぜひご覧になっていただきたいですね。

ずは先生方がおもしろがってくれとすぐくうれしいです。

■「個に応じた指導」は一斉授業でも行える■

阿部 ●最近、注目されている「個に応じた指導」についても触れました。個に応じた指導というときに、個別指導だけがそれに該当すると誤解する方がいます。しかし、一斉授業の中でも、しっかりと行えるわけです。きちんと配慮をすれば、個に応じた指導はこういうようにきめ細かくできるのですよ、といういろいろなパターンをモデルとして出しました。

安田 ●「個に応じた指導」には、いろいろなやり方があると思います。ワークシートを利用したもの、また、伏線的な学習、あるいは、コース別に指導する方法などもありますね。日ごろ、みんなの前でしゃべることが苦手な子がいるなど思ったら、わたしは、じゃあ最初の練習はグループにしてみよう、と考えます。このような手だては、



別冊指導書『読む力』の指導

光村チャンネルでは、指導書について案内をしています。

<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/>